

## なぜ英語を学ぶのか、そして「海や川に突き落とされる物語」

言い訳は見苦しい。でも、言い訳を頭の中でいろいろ考えることは誰にでもありますよね。先月、コンピュータが苦手だとカミングアウトしましたが、もう一つ言うなら、英語はもっと苦手です。昨今の教育界のトレンドから言えば、ほぼ「ガラパゴス」状態。それでも、早速「言い訳」をさせてもらうなら、どれだけ先端企業が英語を公用語にしたところで、毎朝「ハロー」とも言わず30年以上勤め上げたんですよって、声を大にして言いたいわけです。言い訳がましい人間は、言い訳を正当化するための手段にも実に周到で、手元にあるのが、作家佐藤優氏のインタビュー記事。「目的なしに、新しい語学を学び始めることは勧めない。基礎がない語学の習得は低いレベルにしか到達せず、ほとんどお金と時間の無駄になる（2020年12月27日「朝日新聞」）」。佐藤氏は元外交官なので、今さら苦手を克服しなくてもいいんだという免罪符をもらったと喜び、めげそうな時にはこの記事を読み返して、自分を励ましています。さらにつけ加えるなら、音楽評論家のピーター・バラカン氏は随分前ですが、プリンスは歌詞が下品過ぎて、どんなに曲が良くても受けつけないという風なことを言っていました。私は英語ができない日本人であることに感謝しながら、プリンスの音楽を存分に楽しんでいます。英語ができずに、本当にラッキーです。

まあ、ずいぶん長い言い訳になりましたが、それでもやっぱり、英語ができたらと思う機会は少なくないわけです。教頭時代に、オーストラリアとシンガポール・マレーシアに生徒引率で行きましたが、人生の中でこんなに無口になったことはないというくらい無口になりました。交流校の方からは「日本から届いた石像か？」と思われていたに違いありません。でも、一番悔しい思い出は、2001年に元クラッシュのジョー・ストラマーの来日コンサートで、楽屋入りするホンモノに遭遇。サインをねだったら、向こうから「What's your name?」と聞かれる始末。ファンを大切にするエピソードはいくらでもあったから、たっぴり話ができる最高のチャンスだったのに、「Thank you very much」としか言えず、本当に悔しい思いをしました。ちなみに、オーストラリアでは「I can't speak English」の発音が悪くて通じてないなと思う瞬間さえありました。やっぱり、生徒諸君には英語をしっかりと学んで、世界を広げて欲しいと本気で思います。

さて、アル・グリーン「Take me to the river」はR&Bの名曲ですが、初めて聴いたのはトキング・ヘッズのカバー（1978年発表）でした。「川に連れて行って、ボクを水の中に突き落としてくれ」というバカップルのおふざけソングと長い間思い込んでいましたが、最近になって、「Take me to the river」には「洗礼（キリスト教で罪を洗い清めること）」の意味があることを知りました。そうすると、アル・グリーンがその後、牧師となり宣教活動に力を入れたことも合点がいきました。まあ、勉強に限らず、少しでも英語ができれば、楽しみが広がるという例です。最後に、片岡義男氏の小説で、デート中に男の人がいきなり、栈橋の突端からきれいな海を眺めている恋人を徐行させた車のバンパーで追いつめて海に突き落とすという短編があります。ミステリーでもなければ、バカップルのおふざけ話でもありません。素敵なおふざけ話で、タイトルは「さっきまで優しかったひと」（ホントそのまんま!）。機会があれば読んでみて下さい。

令和5年6月1日 大村城南高等学校長 中小路尚也